

H25. 1. 26

# 治療のさじ加減

Dr.

## 和



「抗がん剤」シリーズ⑨

がんには、原発巣と転移巣があります。原発巣と転移巣の関係は、親分と子分の関係に似ています。子分は、親分の命令で動いています。親分は子分に「勝手に暴れるなよ！」という指示を出しています。実はがんの原発巣も転移巣に同じような指令を出しているのです。

がんの指令はサイトカインという全身を巡るホルモンのような物質によって出され、末端まで制御されています。すでに全身に散らばった子分は、親分の指令でおとなしくしています。しかし、その親分が、手術で、しゅっ引かれたらどうなるか？

## がん細胞にも「上下関係」

「おとなしくしているよ」という指令が出なくなり、残った子分たちは、勝手な反乱を開始するのです。

これまで抑圧されていた反動もあるのか、激しく暴れ出します。場合によっては、子分の中でも力がある「番頭」が新しく取り仕切ることもあります。

前回話した2枚のタチの悪い肝臓がんにはそんな裏があったのです。小さくてもすでに全身に転移し、親分を摘出してしまったばかりに、子分が暴れて親分の復讐をする。経験ある外科医は「がんが暴れる」という表現をします。

がんの3大治療は、とても単純なものにみえます。しかし単純なのは、初回手術で完全切除ができたときです。多くの場合、親分ではなく、子分たちとの闘いに戸惑うのです。

子分の中でも、賢い子分が次の親分になります。元の親分は意外に人情味があったが、新しい親分は情け容赦ない場合があります。がんの勢いも、味方である免疫能も、常に揺れ動いています。揺れ動かないのは、抗がん剤という薬剤だけ。抗がん剤治療は「レジューム」というものに従って行われます。料理でいうなら「レシピ」でしようか。医学界で認められた一定の手順に沿って、半ば自動的に行われます。しかし、それを受け止めるがんも、免疫能も常に揺れ動いていることをイメージしておくべきでしょう。



長尾和宏 (ながお・かずひろ)  
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穩死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。54歳。

した。このような「親分が子分を制御」しているメカニズムが徐々に解明されてきました。親分とは「がん幹細胞」のことです。現在、がん幹細胞を標的にしたがん治療が研究されています。

抗がん剤や分子標的薬ががんを攻撃します。それぞれ絨毯爆撃とピンポイント攻撃に例えられます。手術で親分を摘出し、子分は放射線や抗がん剤でたたき……。こう書くと

腫瘍マーカーの動きが決して一定ではないことは、われわれの血圧や脈拍が一定ではないことと似ています。人間の免疫能も同様に、常に揺れ動いています。

**がん幹細胞** がん細胞のうち幹細胞の性質をもった細胞。がん幹細胞が分裂して、がんは増殖する。1997年、急性骨髄性白血病において同定され、2000年代になってさまざまながんで見えだされている。

ひょうご